

ハンと企業家

——ラウザーン荘の成立と終焉1913-1915——

塩 谷 哲 史

は じ め に

第1章 ヒヴァ・ハン国における改革の開始とアンドロニコフの土地取得交渉

第2章 ラウザーン荘の成立

第3章 トルクメン問題とラウザーン荘の終焉

結 論

参 考 文 献

は じ め に

アムダリヤ下流域のホラズム・オアシスでは、16世紀初頭キプチャク草原から南下したウズベク遊牧集団がヒヴァ・ハン国を建国した。このハン国では、チングス統のハンを君主に戴く分権的な体制が続いたが、1804年ウズベク・コングラト族出身のエルトゥザルが自らハン位に就いて新王朝（コングラト朝、1804-1920年）を創始し、集権的な体制構築を目指した。1830-1840年代のハンたちはハン国西部において灌漑事業を推進し、その結果17世紀以降大規模に部族単位でホラズムへと移動してきていた遊牧トルクメン（とりわけヨムート族）

* 本稿は平成24年度科学研究費補助金（若手研究(B), 課題番号：22720263）の研究成果の一部である。また筆者は、「文書史料による近代中央アジアのイスラーム社会史研究」（基盤研究(B), 課題番号：21320134, 代表：堀川徹・京都外国語大学教授）が実施している現地史料調査に参加することで、本稿執筆の手がかりを得ることができた。ここに深く謝意を表したい。

* * 本稿の月日の表記は原則として断りがない限りロシアのユリウス暦により算用数字で示している。それに対応するヒジュラ暦の月日を加えるときは、/ で区切ってその前に示している。

の定住化が進展した。そしてトルクメンはハン国に軍事力を提供することと引き換えに新たな灌漑地を得るとともに、免税・免役の特権を有した。しかし1850-1860年代のトルクメンの反乱に対して、ヒヴァ・ハンはラウザーン運河を二度にわたり封鎖したため、ハン国西部の灌漑地は荒廃し、トルクメンの牧畜への回帰が進んだ〔Брегель 1961; 小前2001⁽¹⁾〕。一方で1860年代より中央アジア南部定住オアシス地域への軍事征服を本格化させた帝政ロシアは、1873年ヒヴァ遠征に着手し、これを占領した。こうして1917年のロシア革命に至るまで帝政ロシアとヒヴァ・ハン国との関係は、1873年8月12日両者間で締結された和平条約によって規定され、ハン国はロシアの保護下に入り、ロシアに割譲されたアムダリヤ右岸（東岸）には、トルキスタン総督の管轄下に1874年アムダリヤ分区 Амударьинский отдел が設置された。そしてその分区長官は、ハン国政府と帝政ロシア（中央政府およびトルキスタン総督府）との交渉を直近で監督したのである〔Becker 1968: 72-78⁽²⁾〕。

さて先行研究では、保護国期のヒヴァ・ハン国領内におけるロシア帝国臣民の商業上の特権的地位が強調されてきた〔Бартольд 1927: 237; Becker 1968: 78〕。1913年に起きたサンクトペテルブルグの宮廷貴族アンドロニコフ公 Михаил Михайлович Андроников（1875-1919年）と露亜銀行 Русско-Азиатский банк 頭取プチャーロフ Алексей Иванович Путилов（1866-1937年）のラウザーン周辺での土地取得は、こうした特権的地位を利用したものとなっている。すなわちこの土地取得は、ラスプーチンや陸相スホムリーノフ В. А. Сухомлинов（在任1909年3月-1915年6月）など帝政ロシア政府内の有力者、高官と人脈を持つ政治的山師 политический авантюрист であるアンドロニコフを中心とした、確たる基盤 серьёзная основа を持たない彼らに有利な投機的な土地取引であり、ヒヴァ・ハンに対するゆすり вымогательство の一手段であった、と言及されるに過ぎない〔Погорельский 1968: 87-89; Садыков 1972: 147-149〕。しかしこの見方は、

(1) ラウザーン運河は、19世紀初頭までにカラカルバクの有力者ラウザーン・バイ Lawzān Bāy によってホラズム中部に建設された。1830年ごろアムダリヤの流水がラウザーン運河に向かって氾濫し、その後一帯が湖沼となった。この機会を利用して、ヒヴァ・ハンたちはハン国西部の灌漑事業に着手したのである。

(2) 1873年の和平条約の内容は、〔Жуковский 1915: 179-183〕を参照。

当時の帝政ロシアの軍政官が残した史料の記述に依拠したものであり、ハン国政府やアンドロニコフらの動きとその意図を十分に説明しうるものではない。そして具体的な土地取得交渉の経過は明らかではなく、また先行研究間では当該土地の規模や価格すら一致していないのである⁽³⁾。

幸いこの事件を再構成し、その意義づけを行うためには複数の史料群が存在する。それらは、①イチャン・カラ博物館蔵3894文書、②同時代のヒヴァで書かれた年代記およびムスリム改革派知識人たち（青年ヒヴァ人 Yāsh Khīvalīklār）の回想録、③ロシア植民地行政文書、④露亜銀行の文書である⁽⁴⁾。本論では、

(3) ポゴレリスキーは、アンドロニコフとプチャーロフが、19400デシャチーナの土地を68万500ルーブルで取得したと述べている [Погорельский 1968: 88]。サーディコフは、両者が14万3000デシャチーナ（32万5000タナープ）の土地を99年間賃借した、と述べている [Садыков 1965: 138; Садыков 1972: 147-148]。ヴェクセリマンは、両者が2万デシャチーナの土地を65万ルーブルで取得したと述べている [Вексельман 1987: 82-83]。1デシャチーナは1.092ヘクタールである。19世紀のホラズムでは、1タナープは4037-4097平方メートルであった [Bregel 2007: 68]。

(4) ウズベキスタン共和国ヒヴァ市のイチャン・カラ博物館に所蔵される3894番文書は、1332年サファル月16日/1913年12月30日当時のヒヴァ・ハン国の君主イスファンディヤール・ハン（Isfandiyār Khān, 在位1910-1918年）が發布した勅令 yār-līgh / ярлык のうつしである。名宛人は、アンドロニコフ、プチャーロフ兩名である。本文書は、ヒヴァ・ハンたちが「ノコルの俸給のために mavājib-i nūkarīya ūchūn / nūkar mavājibī ūchūn」という文言を伴って、国有地 mamlaka-yi pādshāhī の所有権を私人に移転するために發布した勅令群 [Bregel 2007: 3-5] と形式上一致する。しかし他の勅令とは異なり、1) 勅令に続いて、売買文書 vaṣīqa, 契約書 ‘ahd-nāma / договор が付され、全部で12葉からなり、2) テュルク語とロシア語の合璧であり、3) 11葉目表面にアムダリヤ分区分長官レイコシン Нил Сергеевич Лыкошин（在任1912-1914年）がこの土地売買契約を認証した旨を示す自筆署名がある、という特徴をもつ。なお契約書のみ1332年サファル月17日/1913年12月31日付となっている。

②の史料群については、カームカール Mullā Ḥasan Murād Qārī Kāmkār が1916年3月に至るイスファンディヤール・ハンの治世について記した、成立年不詳の年代記 [Gulshan] を用いる [Юсупова и Джалилова 1998: 234]。またのちに青年ヒヴァ人の首班となるユースポフ Pahlavān Niyāz Ḥājī Yūsuf (1936年没) の回想録は、そのキリル文字転写版である [Юсупов 1999] を用いたが、誤記も多いため、アラビア文字テュルク語で書かれた私蔵写本を適宜参照した。本文書の詳細や現状については別の機会に譲りたい。

③の史料群は、おもにウズベキスタン中央国立文書館 [ЦГА РУз] の所蔵分類 1 「トルキスタン総督官房 Канцелярия Туркестанского генерал-губернатора」、所蔵分類 2 「トルキスタン総督付外交官 Дипломатический чиновник при

これらの複数の史料群を用いつつ、①アンドロニコフらのハン国政府との土地取得交渉過程を明らかにし、②この両者による土地売買の意図を解明し、③当時その土地が位置した地域の状況と土地取得のその後を明らかにすることにより、アムダリヤ下流域に位置するホラズム・オアシスにおけるソ連成立以前の企業家 *предприниматель* 主体の大規模灌漑の試みとその限界について議論してみたい。

第1章 ヒヴァ・ハン国における改革の開始とアンドロニコフの土地取得交渉

帝政ロシア政府はその保護国ヒヴァ・ハン国に対して、平和が維持される限りその内政に干渉せず、その結果軍隊の縮減と奴隷制 *рабство* 廃止以外にハン国の統治体制や社会構造に変化はなかったとされる [Bregel 1992: 203]。しかし1910年8月16日サイイド・ムハンマド・ラヒーム・ハンが没して、その子イスファンディヤール・トラがハンに即位すると、大宰相 *vazīr-i akbar* に任命されたサイイド・イスラーム・ホジャ Sayyid Islām Khvāja (1913年没) の主導により、ハン国の改革が開始された。1328年ラマザーン月10日/1910年9月2日付でイスファンディヤール・ハンは、国庫の収支の明確化、政府役人 *‘amaldār* の俸給確定、税制改革、先進的施設の導入などを目標とした改革の勅令を發布した。灌漑面では、灌漑網の改善と拡大ならびに定住民への賦役 *bīgār* の廃止と灌漑作業への動員の有償化が布告された [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 291, лл. 149-149a; Погорельский 1968: 72-73]。この改革では、まず先進的施設の導入が図られたが、これらはハン国政府の財政難を招いた⁽⁵⁾。そしてハン国全土で土地の

Туркестанском генерал-губернаторе) (1899年外務省の管轄下に総督付で任命された官職) および所蔵分類7「トルキスタン地方農業国有財産局 Управление замяделения и государственных имуществ в Туркестанском крае」に含まれる文書を利用している。

④の史料群は、ロシア国立歴史文書館 [РГИА] の所蔵分類630「露亜銀行」に含まれる、アンドロニコフらによるヒヴァ・ハン国領内の土地取得に関する案件の諸文書を利用した。

(5) ヒヴァでは、病院、郵便電信局、監獄、新方式マクタブとマドラサ、欧風の宮殿であるヌールッラー・バイ Nūr Allāh Bāy 宮殿の建設、ヒヴァの北門にあたるコ

測量を実施し、タナーブを単位とした所有面積に応じて、土地所有者に一律の地税 *sālgūt* を課すという税制改革が、その解決策として推進されることになった。しかしこの試みは、大土地所有者のみならず、トルクメン諸部族の有力者たちの反発を受けた [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, лл. 50об.-51; Becker 1968: 229]。なぜならば、当時トルクメンが納めていた地税（定額地税 *sālgūt kesmā*）は、1873年の保護国化以降に導入され、ハン国政府と彼らの長老たちとの交渉により納税額が決定されており、他の定住民のそれに比して負担が軽かったためである⁽⁶⁾。

また冒頭で述べたように、1850年代後半以降トルクメンの反乱とラウザーン運河の封鎖により、ホラズム西部の荒廃と1830-1840年代に定住に移行したトルクメンの牧畜への回帰が進んだ。ただし1869年以降ヒヴァ・ハン国政府は、ラウザーン運河の本流を封鎖したまま、南北の支流（ハン・ヤブとシャー・ムラード）を拡張し、1830-1840年代に灌漑されたハン国西部の一部復興を進めていた [Shioya 2011: 129]。この政策は、ラウザーン運河の本流を利用して、カスピ海に通じるアムダリヤ旧河床の復興を目指す帝政ロシア政府の方針とは相容れないものであった⁽⁷⁾。1894年旧河床復興の一環として新ラウザーン運河の

シュ・ダルヴァーザ *Qūsh Darvāzasī* の改築が行われた。また、ハン国の幹線運河に架かる鉄橋の建設も決定された [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, л. 57-57об.; *Gulshan*: 13-14; Юсупов 1999: 59, 65]。ルイコシンは、こうした建設事業がハン国財政の負担であると指摘している [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, л. 57-57об.]。一方で当時の宮廷史家によると、「穀物の市価は25タンガ、1タンガは32ホラズム銅貨と等価であるが、きわめて高かった。窮した臣民たちはやってきて〔建設の〕日雇い仕事をし、〔ハンは〕日当として毎日5つのナンと3タンガを〔彼らに〕与えた。窮した臣民たちは一つのナンを食べ、残った四つのナンをその子どもたちに与えて食べさせ、ハンのために祈念し、安心して食事をした」[*Gulshan*: 14]。ハンの建設事業が、改革の一環であるのみならず、ハン国内の穀物価格の高騰を受けての救貧事業としての性格もあわせ持っていたと考えることもできよう。

- (6) 当時、トルクメンはハン国の総面積の3分の1にあたる土地を利用しながら、税については6分の1を納めているに過ぎないと考えられていた [Карпов и Бацер 1930: 49]。また別の情報によれば、1910年のハン国の地税収入は総額約31万4000ルーブルであり、トルクメンはそのうち約6万ルーブルを負担していたとされる [Тухтаметов 1969: 115]。
- (7) 帝政ロシア政府によるアムダリヤのカスピ海への転流の試みと、ハン国の灌漑事業への継続的な干渉については、ヒヴァ・ハン国に対する不干渉政策の実施というこれまでの指摘の見直しを含めて、別途考察を予定している。

建設が行われたが、その水利用をめぐり、1899年からトルクメン・ヨムート族の一集団である湖ヨムート Kūlī Yamūt の有力者マフムード・ハン・アタリハノフ Maḥmūd Khān Ātākhānūf を中心としたハン国政府への抵抗が始まった⁽⁸⁾。1911年アムダリヤ分区長官グルシャノフスキーの介入により、マフムード・ハンらはラウザーン運河一帯の浚渫を指揮し、1899年の騒擾後流れが止まった新ラウザーン運河のみならず、ラウザーン運河の本流をも復興させた [ЦГА ВУЗ: ф. 2, оп. 1, д. 314, лл. 38, 42об.-43]。しかし翌1912年には、これらの運河の利用と管理をめぐって、ハン国政府とマフムード・ハンらの対立が深まり、1912年12月から1913年1月にかけてトルクメンの有力者の殺害事件を契機に、ガザヴァト運河下流域から古ウルゲンチにかけてトルクメンの反乱が発生した。ヒヴァ宮廷では、武力による鎮圧を控えようとしたイスラーム・ホジャに対し、シャイフ・ナザル・ヤサウルバシ Shaykh Nazar Yasāvulbāshī を中心とした強硬派の意見が優勢となり、ハン国軍とトルクメンとの武力衝突が起きて、ルイコシンがロシア軍を率いて介入する事態となった [Карпов и Бацер 1930: 48-52⁽⁹⁾]。これはハン国に対して不干渉政策を採っていたトルキスタン総督府が、1877年以来初めてヒヴァ・ハン国内の問題に軍隊を派遣した事件であった [Becker 1968: 229-231]。このように、1913年6月アンドロニコフがヒヴァを訪問した時点で、ハン国は改革の実施による財政難と、ラウザーン運河の管理をめぐるマフムード・ハン・アタリハノフ率いる勢力との紛争に見られるトルクメン問題に直面していたのである。

さてイチャン・カラ博物館蔵3894文書によると、1331年ラジャブ月27日/1913年6月17日アンドロニコフは、ヒヴァにおいてイスファンディヤール・ハンに謁見し、ハン国領内の土地取得を請願した [ГМИ: кп. 3894, лл. 3об.-4]。

(8) 1899年からのトルクメンの騒擾については、[Марков 1961: 138-142; Тухтаметов 1969: 63-64] を参照。

(9) イスラーム・ホジャの父イブラーヒーム・ホジャ Ibrāhīm Khvāja (1890年没) とシャイフ・ナザル・ヤサウルバシの父ムハンマド・ムラード・ディーヴァーンベギ Muḥammad Murād Dīvānbīgī (1901年没) は宮廷内での影響力をめぐってライヴァル関係にあり、それはその子たちの世代にも引き継がれた。1911年末にはシャイフ・ナザル・ヤサウルバシとその兄弟たちが一時拘禁される事件が起きた [Погорельский 1968: 74-76]。

アンドロニコフがヒヴァを訪れるに至った経緯はいまだ明らかではない。しかし同日付でアンドロニコフは、イスラーム・ホジャとの間で、古ウルゲンチ、ラウザーン周辺にあるアムダリヤ沿岸の「ヒヴァ政府が所有する土地 принадлежащие Хивинскому правительству земель」すなわち国有地 *mamlaka-yi pādshāhī* 1 万デシャチーナの「所有権 *мюльковое владение*」を取得する仮契約 *временный договор* を締結した。この仮契約は以下の5カ条からなり、アンドロニコフとともにヒヴァを訪問したエルモラエフ技師 *Мефодий Николаевич Ермолаев* がアンドロニコフの代理人 *доверенный* として、土地の測量、四囲の確定、ヒヴァ政府への地図の提出を行うこと、地図には取得予定地に含まれる私有地を明記すること、ヒヴァ政府が作成中の「新たな規定 *новые правила*」に従い、11月1日までにヒヴァ政府とアンドロニコフが正式な契約を締結すること、アンドロニコフは取得した土地の「所有権」を獲得すること、11月1日までに契約が締結されなければ、ヒヴァ政府は第三者に当該土地を売却する権利を有すること、が述べられている⁽¹⁰⁾。ここに挙げられた「新たな規定」とは、1913年7月初旬にイスファンディヤール・ハンがアムダリヤ分区長官ルイコシンにその原案を送付した分与規定を指しているが、それについては後述する。

サンクトペテルブルグに帰還したアンドロニコフは、1913年8月28日付でこの土地取得に関する委任状 *доверенность* をエルモラエフに与えた⁽¹¹⁾。8月30日エルモラエフは、サンクトペテルブルグを出発し、タシケントを経由して、9月19日ごろヒヴァに到着した〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 15; ЦГА РУз: ф. 1, оп. 17, д. 957, л. 54〕。

一方、1913年9月4日以前にアンドロニコフは、仮契約に示された権利・義

(10) 仮契約の締結の経緯とその内容については、〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, лл. 1-4〕を参照。同日アンドロニコフは、古ウルゲンチ周辺の国有地30万タナープの賃借権ないし所有権の取得もハンに請願している〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 2〕。しかしこの計画については、管見の限り史料がなく明らかではない。

(11) 委任状の内容は、対象となる土地の灌漑調査、測量、境界画定、地図作成、土地の所有権ないし賃借権の取得契約の締結、土地の灌漑・利用計画および予算案の策定、取得した土地に関わる請願や訴訟への対応など多岐にわたっていた〔ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 324, лл. 36-37〕。

務を均分する条件で、露亜銀行頭取プチャーロフと土地の共同取得に合意した〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 17〕。そして9月30日プチャーロフは、露亜銀行の新ウルゲンチ支店長であるフリュリング Иван Иванович Флюлинг に、エルモラエフとともに、この土地取得の交渉に加わり、自身に代わって契約を締結する旨を一任した〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 26-26об.〕。こうして、エルモラエフ技師と露亜銀行新ウルゲンチ支店長フリュリングが、アンドロニコフ、プチャーロフ両名の代理人として、イスファンディヤール・ハンと土地取得交渉を現地で行うことになった。そしてエルモラエフは、露亜銀行新ウルゲンチ支店の融資を受けながら、仮契約に沿った作業を実施することになった⁽¹²⁾。

1913年10月18日付電報でエルモラエフは、当初の取得予定地の視察を終えた後、その土地に替えて、アムダリヤ沿岸からダリヤルクに至る、ラウザーンにある二つの運河（ハン・ヤブとスフバト・ヤルガン）に挟まれた、2万2000デシヤチーナ（のちに2万デシヤチーナに変更）の無主の国有地 *свободные же казенные земли* を65万ルーブルで取得するよう計画を変更する旨を、アンドロニコフに伝えた〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 34-34об.〕。そして彼は、仮契約および委任状の指示に従い、新たな取得予定の土地の測量、四囲の確定、ヒヴァ・ハン国政府に提出する地図の作成を開始した。

1913年11月後半からヒヴァにおいて、エルモラエフらとイスファンディヤール・ハンとの間で土地取得交渉が行われたが、トルキスタン総督サムソノフ А. В. Самсонов（在任1909-1914年）の交渉への介入などにより長期化した。そして1332年サファル月16日/1913年12月30日付でイスファンディヤール・ハンにはアンドロニコフ、プチャーロフ両名に宛てた勅令を發布した。そのうつしであるイチャン・カラ博物館蔵3894文書によると、ハンは勅令に、ホジャエリ、古ウルゲンチ両バク領のラウザーン Lawzān (Lawdān) にある国有地19400デシヤチーナを63万500ルーブルで両名の私有地 *milk* に移転する旨を記し〔ГМИ: кп. 3894, лл. 1об.-3〕、それに付された売買文書により同地にある1500タナープのハ

(12) たとえば、エルモラエフの土地の境界線画定の費用5014ルーブル50カペイカは、露亜銀行新ウルゲンチ支店が支払った〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, лл. 22-23〕。

ンの私有地を19500ルーブルで両名に売却し [ГМИ: кп. 3894, л. 3-3о6.], さらにこれらの売買に関して20カ条の契約書を付した [ГМИ: кп. 3894, лл. 3о6.-11о6.]. 1914年1月27日この売買文書と契約書を付された勅令はリュコシンのもとに提出され、契約の認証を受けた [ГМИ: кп. 3894, л. 10о6.; ЦГА РУз: ф. 2, оп. 2, д. 475, лл. 1-2о6.]. こうしてアンドロニコフとプチャーロフ両名は、ヒヴァ・ハン国領内ラウザーン運河沿岸の2万デシャチーナ (厳密には19962.5デシャチーナ) の土地所有権を取得したのである。

第2章 ラウザーン荘の成立

それでは、帝政ロシアの宮廷貴族アンドロニコフ公と露亜銀行頭取プチャーロフに、エルモラエフ技師、露亜銀行新ウルゲンチ支店長フリュリングが加わったヒヴァ・ハン国領内の土地取得の目的は何であったのか。

エルモラエフは、少なくとも1909年以前から、外国資本やサントペテルブルグの企業家たちの資本を誘致した、トルキスタン各地 (ムルガープ、テジェン流域、フェルガナ州のシルダリヤ流域) での灌漑事業を計画していた⁽¹³⁾。さらに1909年彼はアンドロニコフとともに、ブハラ・アミール国領内のカルシ周辺における灌漑事業に乗り出した [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 852, лл. 23-24⁽¹⁴⁾]. そして彼が作成した1913年6月28日付「ヒヴァ・ハン国の土地の灌漑についての簡便な覚書 Краткая записка по орошению земель Хивинского ханства」 [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, лл. 10-13о6.] [以下「覚書」と略す] は、彼らのヒヴァ・ハン国領内の土地取得もまた灌漑事業を目的としたものであったことを示している。

この「覚書」によるとエルモラエフは、ヒヴァ・ハン国領内において、ラウザーン運河周辺を灌漑事業の対象に選んだ。エルモラエフによれば、ラウザーンには「現地人がきわめて肥沃で利用しやすいと考えている」ところの、「ア

(13) これらの計画については、[Вексельман 1987: 79-80, 83-84] を参照。

(14) しかしこの事業は、1913年の時点で、ブハラ政府よりカシュカダリヤの余剰水 свободные воды と25000デシャチーナの土地区画の利用権 право пользования を得るにとどまっていた。

ムダリヤの泥土の堆積によって形成された、粘泥を含む砂でおおわれた沖積土」が存在しており、1 デシャチーナあたりの収穫量は、穀類（小麦）130-240プード⁽¹⁵⁾、モロコシ *juhārā* 500プード、綿花100-200プード、アルファアルファ800プード以上に達すると見込まれた [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 10об.; ЦГА РУз: ф. 7, оп. 1, д. 5007, л. 14]。そして彼は、アムダリヤ上流域、中流域での灌漑発展とそれに伴う水利用量の増加を考慮に入れたとしても、新たに150-200万デシャチーナの土地を灌漑する余剰水があり、またヒヴァ・ハン国領内の古ウルゲンチとサルカムシュ湖に挟まれた土地に、100万デシャチーナに及ぶ灌漑地を創出することが可能であると述べている [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 10-10об.]。このラウザーン周辺の肥沃さと灌漑の可能性への言及は、保護国化以降トルキスタン総督府の軍政官たちや灌漑技師たちが繰り返してきたものである [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 2, д. 168, лл. 29об.-30; Гельман 1900: 123-124; Глуховской 1893: 79-80⁽¹⁶⁾]。

一方でエルモラエフは、「覚書」の中で現地の伝統的な灌漑方法、施設の問題点を指摘している。つまり彼によれば、①スフバト・ヤルガン、ハン・ヤブ、ラウザーンという既存の三つの運河にはアムダリヤからの取水施設がないために水量に限られ、②利用できる時期も4月末から8月までである、③三つの運河の水量は合計で毎秒6.14立方サージェン⁽¹⁷⁾であるが、現地人は伝統的なチギリ *chīqir* / *чигирь*⁽¹⁸⁾によってその一部を灌漑に利用するのみで、多くの水は下流で未利用のまま沼沢地を形成するだけであった [ЦГА РУз: ф. 7, оп. 1, д. 5007, л. 13об.]。

エルモラエフは、こうした問題点を動力灌漑の導入によって克服しようとし

(15) 1 プードは、16.38キログラムに相当する。

(16) ただしロシアの東洋学者バルトリドは、アムダリヤ分区領に相当するアムダリヤ右岸の地域で、過去に大規模な灌漑が行われていた事実を考慮せず、アムダリヤ左岸の旧河床（ダリヤルク）へと灌漑地を拡大しようとする諸計画を、アムダリヤの歴史に対する無知に起因したものであると述べている [Бартольд 1927: 153]。

(17) 1 サージェンは、2.134メートルに相当する。

(18) 畜力などを利用した揚水車輪。その諸形態については、[Гулямов 1957: 253-259] を参照。

た。彼は、露亜銀行の110万ルーブルの融資をもとに、4基のディーゼルエンジンを搭載した1000馬力の出力をもつ中央発電所を建設して、その電力を揚水所のポンプに供給する計画を立てた〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, лл. 11о6.-13о6.⁽¹⁹⁾〕。彼は動力灌漑導入の利点として、まず新たな運河を建設することなく、既存の運河で十分灌漑が実施できる点を挙げている。そして、肥沃さをもたらす一方、運河に堆積しやすい泥土を多く含む水質ゆえ、浚渫に多大な労働力を要する〔ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, л. 75о6.; Matley 1994: 116〕アムダリヤ流域の灌漑の現状を改善できると指摘した。またアムダリヤの水位の季節差を計算し、耕作期間（3月15日から11月1日）に動力灌漑を必要とする面積は、2万デシャチーナのうち6500デシャチーナに相当すると試算した〔ЦГА РУз: ф. 7, оп. 1, д. 5007, л. 14-14о6.〕。こうしてエルモラエフは、アムダリヤの水質や水位の季節変化を考慮するとともに、当時現地人が独自に導入することが難しかった大規模な動力灌漑施設を、当時ロシア帝国最大の預金額と資産総額を誇った〔矢後 2008: 163-164〕露亜銀行の資本を背景にハン国へ初めて導入しようとしたのである⁽²⁰⁾。

エルモラエフは、ラウザーンにおける灌漑事業により、商品作物である綿花、アルファルファ、および小麦を栽培する計画を立てている。エルモラエフは、当初取得予定の1万デシャチーナに対して、4000デシャチーナを綿花、500デシャチーナをアルファルファ、5500デシャチーナを小麦、大麦、モロコシなどの栽培に割り付ける計画であった。そして年間、綿花131万5500ルーブル、アルファルファ9万ルーブル、小麦など66万ルーブル、合計206万5500ルーブルの総収益を見込んでいた。耕作、動力灌漑施設の導入、工場の建設、灌漑網の整備などへの支出を差し引いても、年間104万500ルーブルの純益を生み出せると試算した。この場合年間1デシャチーナ当たりの純益は104ルーブルとなり、

(19) 当時土地整理農業総局長であったクリヴォシェイン А. В. Кривошеин（在任1905-1915年）も、石油エンジンによる動力灌漑 машинное орошение の導入の有効性を指摘している〔Кривошеин 1912: 42〕。

(20) ルィコシンは、ホラズムにおけるチギリの広範な普及と住民のそれへの依存について述べ、農民が組合を組織して自力で動力灌漑施設を導入することは困難であろう、と述べている〔ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, л. 13о6.〕。

それはフェルガナでの同種の事業による純益（年間1デシャチーナ当たり100ルーブル）に匹敵すると考えられていた〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 13об.^[21]〕。

1860年代後半から進行了ロシアの中央アジア軍事征服の結果、フェルガナやザカスピ州における綿花栽培は拡大したが、当初原綿供給地として期待されていたのは、ブハラ、ヒヴァ両国であった〔Баргольд 1963: 447-448〕。ただしヒヴァ・ハン国に関しては、アムダリヤの航送と隊商路に外部との交通を依存し、鉄道も敷設されず、アメリカ種綿花の普及も鈍かったため、その原綿生産の伸びは、ロシア領トルキスタンのそれに比してはるかに低かった^[22]。しかし1900年ごろからアメリカ種綿花が普及し、1905年にはハン国の綿花播種地の半分でアメリカ種綿花が播種された〔Тухтаметов 1969: 106-107〕。それにともない、ハン国からロシアへの原綿輸出は、1893年の30万プードから、1909年には60万プード、1914-1915年には130万プードと倍増を重ねたのである〔РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 480, л. 3об.; Тухтаметов 1969: 106^[23]〕。

またアルファルファはマメ科の植物で、牧草として利用され、アムダリヤ下流域はその産地の一つとして知られていた。1900-1910年代、アメリカ合衆国政府による西部入植政策と大規模灌漑事業の展開、非熟練農業移民が行った牧畜の拡大にともなう安価な飼料作物の需要増大を背景として、合衆国西部で中央アジア産のアルファルファの需要が高まった〔Gerlach 1997: 3〕。これに伴い、アムダリヤ下流域に位置したヒヴァ・ハン国領内からのアルファルファ輸出は

(21) 土地の規模が2万デシャチーナに変更になったのちの収支計算については、情報を見つけることができなかった。土地取得後の1914年4月19日付でエルモラエフが作成したラウザーンにおける灌漑事業に関する「解説書 пояснительная записка」によると、2万デシャチーナの土地のうち耕作に用いられるのは、その90%にあたる18000デシャチーナであった。栽培作物の中心は綿花であり、土地の5分の2にあたる7200デシャチーナが割り当てられ、残りの5分の3にあたる10800デシャチーナには秋播き、春播き小麦とアルファルファが栽培されることになっていた〔ЦГА РУз: ф. 7, оп. 1, д. 5007, лл. 13-16об.〕。

(22) 1884年アメリカ種（アップランド Upland 種）綿花の試験栽培成功により、この種の綿花栽培が中央アジア各地で盛んになった。しかしヒヴァ・ハン国には、1887年にアメリカ種綿花が招来されたが、1890年代はもっぱら現地種綿花の栽培が行われていた〔Тухтаметов 1969: 106〕。

(23) 1910年代に現地種綿花の輸出は、毎年ほぼ10万プードを推移し、顕著な増加は見られない〔РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 480, л. 3об.〕。

1903年ごろから急増し、第一次大戦開戦に至るまで、大半はハンプルク経由でアメリカ合衆国へと輸出された〔Садыков 1965: 165; Тухтаметов 1969: 107-108²⁴⁾〕。さらに、1911年から1912年にかけてホラズム周辺では不作による穀物価格の高騰が起きており〔*Gulshan*: 8a; ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, л. 77〕、小麦の需要も高まっていた。

ヒヴァ・ハン国で生産された商品作物を、ヨーロッパ・ロシアに輸出する手段として有望視されていたのは、チャルジュイでザカスピ鉄道から分岐し、ヒヴァ、アレクサンドロフ・ガイ Александров Гай を経てサラトフに至る鉄道建設であった。この鉄道開通により、ヒヴァ・ハン国を含むアムダリヤ下流域は、トルキスタンにおいてヨーロッパ・ロシアに最も近い綿花生産地域になると見込まれたのである〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 11〕。エルモラエフは、ラウザーン周辺で生産される綿花、アルファルファなどの商品作物を、この鉄道によってヨーロッパ・ロシアに輸出することを計画しており〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 11〕、1916年4月アンドロニコフはこの鉄道建設を計画するブリケリメイエル А. О. Бригельмейер とニコラエフスキー К. В. Николаевский を中心とした企業家集団に加わっている〔РГИА: ф. 1617, оп. 1, д. 774, л. 1〕。このように、商品作物である綿花、アルファルファの輸出拡大、およびハン国内での小麦の需要の高まりを背景に、企業家がヒヴァ領内での灌漑事業への投資に積極的な姿勢を示すようになったと言えよう。

ハン国内で生産された商品作物の買付と輸出において、露亜銀行は主要な役割を果たしていた。1909年12月露亜銀行の前身である露清銀行がハン国の中心的商業都市・新ウルゲンチに支店を開設した〔Садыков 1965: 151²⁵⁾〕。1910年から1916年まで支店長を務めたフリュリングは、現地人当局 местная туземная

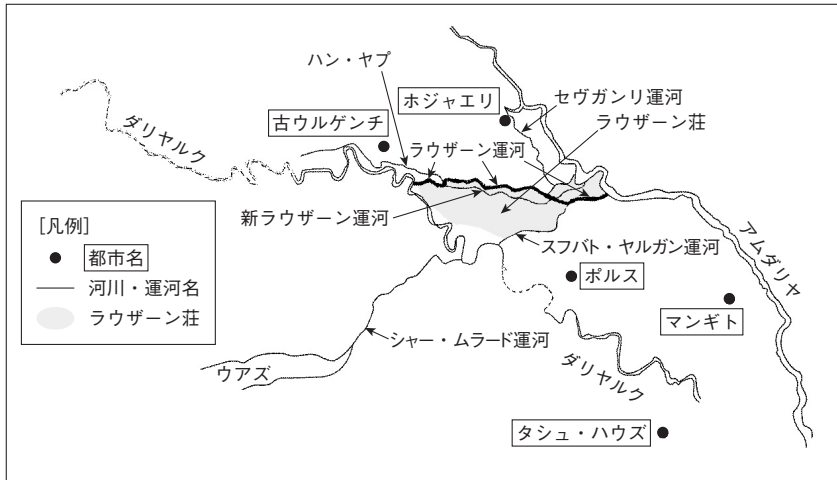
24) ヒヴァ・ハン国から輸出されたアルファルファの量は、1899年28500ブードであったが、1903年約11万ブード、1905年約62万ブード、その後は毎年25万～75万ブードを推移した。1903年に合衆国への輸入が開始された中央アジア南部、アルメニア、イラン産のアルファルファの種は、「トルキスタン Turkestan」という商標で販売された。これらに付着した雑草の種は、のちに西部各地に浸透し、その植生を変えたほどであったという〔Gerlach 1997: 3〕。

25) その後少なくとも1916年に至るまで、同行はハン国内に支店を開設していた唯一の銀行であった。

администрация, すなわちヒヴァ・ハン国政府と結びつきがあるため、経営において独占的な影響力を有していたという [РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 481, лл. 306-406.]。とりわけフリユリングとムハンマド・ヴァファー・バックカーロフ Muḥammad Vafā Baqqālūf との結びつきが注目される。バックカーロフは、イスファンディヤール・ハンの即位以前からその側近として活動し、1913年8月にイスラーム・ホジャが暗殺されると、ハン国宮廷において実質的に彼の後継の地位を占めたが、1916年2月ジュナイド・ハン Junayd Khān 率いるトルクメン・ヨムート族がヒヴァを占領した際に、処刑された。彼の弟アブドゥッラフ マーン・バックカーロフ ‘Abd al-Raḥmān Baqqālūf は、ムハンマド・ヴァファーの存命中商取引に従事し、新ウルゲンチのハーキムも務めた。バックカーロフ家は、新ウルゲンチとタシュハウズに綿繰り工場 хлопкоочистительный завод を所有し、ハン国各地に数千タナーブからなる不動産を所有し、露亜銀行、新ウルゲンチの大商人ムハンマド・ヤーロフ (マディヤロフ) ‘Avāz Bāy Muḥammad Yārūf とともに綿花、アルファルファの買付、取引を行っていた [РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 480, лл. 2306.-2506.; Садыков 1965: 151, 157²⁶⁾]。そしてフリユリングの活動は「銀行勤務にとどまらなかった。彼にはヒヴァ領内での広大な土地購入の手配をするという大きな仕事」[Туркестанский кулвер: 1916 № 168], つまりラウザーン周辺における土地取得という事業があったのである。露亜銀行は、先述の動力灌漑導入のための融資を予定していたほか、5年間の分割払いとされた土地の購入価格65万ルーブルのうち、1916年11月までに43万ルーブルをハン国政府に支払っている [ГМИ: кп 3894, л. 5-506.; РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 478, лл. 105-106]。さらに、露亜銀行新ウルゲンチ支店は、ハン国政府との土地取得交渉の諸経費、ルイコシンの契約認証に関わる支出を負担し、また土地周辺に警備隊 охрана を組織し、その経費を支払った [РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 478, лл. 5-8; оп. 2, д. 853, лл. 101-102, 111-115]。

このようにアンドロニコフらの土地取得を、確たる基盤を持たない投機的土

(26) ルイコシンは、1914年7月の報告書の中で、「ハン国のすべての事柄は、今やバックカーロフ兄弟の商取引に依存している」と述べている [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 2, д. 475, л. 53]。



地図 ラウザーン荘とその周辺

地取引とのみ評価するだけでは不十分である。つまりこの土地取得は、宮廷貴族アンドロニコフ、灌漑技術計画を策定した技師エルモラエフ、資本を提供した露亜銀行という三者からなる企業家たちによる農園設立事業の初期段階であった。彼らは、ヒヴァ・ハン国領内のラウザーン運河沿岸からダリヤルクに至る地域に大規模な動力灌漑施設を導入し、アムダリヤの余剰水を利用した通年灌漑を実現しようとした²⁷⁾。そして新たに灌漑された土地で生産された商品作物を、敷設予定の鉄道を利用してヨーロッパ・ロシアに輸出するという計画を立てていたのである。そして彼らはこの農園を「ラウザーン荘 дача Лаузан」と呼び、1914年4月にはアンドロニコフとプチャーロフの間で、プチャーロフを代表とする株式会社 акционерное общество の設立と、その会社によるラウザーン荘の経営が取りきめられていった [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, лл. 26-26об., 136-138]。

さて、アンドロニコフはラウザーン荘設立に向けた活動の中で中心的な役割

²⁷⁾ ホジャエリに居住していたアルメニア人サファリヤンツが、1912年ごろから小規模な土地を取得しつつ、動力灌漑の導入を図っていた [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 352, л. 45; ф. 2, оп. 2, д. 475, л. 506.]。

を果たしていたが、それを可能にした背景とは何であったのか。アンドロニコフが、1913年前後にトルキスタン行政を管轄する中央政府内の省庁の高官（陸相スホムリーノフや参謀本部アジア部長ツェイリ C. E. Цейль）と親交を有していたことは間違いない⁽²⁸⁾。ウィリアム・フュラーは、アンドロニコフがサンクトペテルブルグ中に広がる自身の情報網を利用し、同窓・地縁・血縁などで形成された派閥間の抗争が激しかった各省の大臣や官僚たちに、そのライヴァルたちの情報を提供することで、「ロシアの官僚機構上層部で異様な立場 *bizarre status*」を得ることができた、と述べている [Fuller 2006: 70-71]。1900年代から存在したとされるアンドロニコフのサロン [Стогов 2005: 19-20] は、そうした活動の場を提供したのであろう。さらに二月革命後の1917年3月、アンドロニコフの家宅搜索を実施したルドネフ Владимир Михайлович Руднев は、彼が省庁への請願の仲介を行っていたことを示す、省庁ごとに整理された多数の書類入れを目撃した⁽²⁹⁾。また1913年6月アンドロニコフはヒヴァ訪問に際して、王太子ティムール・ガーズイー・トラ Timūr Ghāzī Tūra への「貴下 Ero Светлость」の称号授与の斡旋を行うことを約束し、さらにアムダリヤ分区分長官を経由せずペテルブルグと直接の交渉を可能にする外務省直属の政治代表部をヒヴァに導入する提案を行ったという [ЦГА РУз: ф. 1, оп. 17, д. 957, л. 406.⁽³⁰⁾]

(28) しかし、「トルキスタンの真の統治機関 подлинное начальство Туркестана」と呼ばれていた参謀本部アジア部の部長を務めていたツェイリは1913年12月に退任し、1914年春にはスホムリーノフ夫妻との親交も、アンドロニコフがスホムリーノフの妻の不倫を暴露したことにより破綻した [Fuller 2006: 109-110; Marshall 2006: 31, 172; Редигер 1999: 219]。これらは、ラウザーン荘の事業遂行を困難にする一要因となったと考えられる。

(29) これらの書類の中には「財務省と農業省を通じて複雑な株式会社を組織し、彼自身が中心的役割を果たしていたムルガープ平原の灌漑に関する契約書」も含まれていた [Руднев 1998: 157-158]。

(30) ブハラには外務省直属の政治代表部が設置され、アミールはペテルブルグとの直接交渉が可能であったが、ヒヴァ・ハンはアムダリヤ分区分長官、トルキスタン総督府を経由してのみ交渉が可能であった [Бартольд 1927: 237, 242-243]。1902年ヒヴァ・ハンは「貴下」の称号を受けたが、そのときすでにブハラ・アミールは「殿下 Ero Высочество」の称号を帯びていた [Becker 1968: 227-228]。こうした外交交渉のあり方や称号の違いに象徴されるように、ヒヴァ・ハンはつねにブハラ・アミール国に対して劣位に置かれていた [Бартольд 1927: 216, 237]。なお、1913年10月5日ティムール・ガーズイー・トラは貴下の称号を得ることがで

これに対し、イスファンディヤール・ハンは、アンドロニコフの地位に信頼を寄せていた [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 352, д. 46]。彼の政府高官との人脈や省庁への請願手法はラウザーン荘設立の認可をロシア政府から得る際にも発揮されたであろう³¹⁾。そしてイスファンディヤール・ハンに対しては、ブハラ・アミールより劣位に置かれたヒヴァ・ハンの対抗心を煽るとともに、自己の政治力への期待を通して自身への信頼を高めようとしていたのではないだろうか。

さらにアンドロニコフがヒヴァ・ハンとの直接交渉により、プチャーロフとともにハン国領内の土地所有権 *собственность* を取得したことは、トルキスタンの灌漑事業に進出した企業家たちの活動の中で画期的な事件であった³²⁾。乾燥地域のトルキスタンにおける大規模灌漑事業の経費、リスクはともに大きかったため、企業家は政府による投資の保障、土地所有権取得の認可を求めた [Joffe 1995: 376; Morrison 2008: 233-234]。また企業家たちは、不特定多数から資金を調達して経営を行うため、株式会社の設立を計画した。しかし当時それらは政府の規制によりトルキスタンにおいては困難であった。まず、1886年に制定されたトルキスタン地方統治規程においては、第255条で現地人に土地の占有 *владение*、利用 *пользование*、処分 *распоряжение* の権利は与えられたが、土地所有権は国家に帰属するものとされ、さらに企業家が新たに灌漑事業を起こす無主地 *свободная земля* にもまた、第257条において国家の所有権 *государственная собственность* が設定されていた [Положение 1901: 70-71]。そのため、企業家は土地所有権を帝政ロシア政府から取得しなければならなかつ

きた [Жуковский 1913: 208]。

- (31) 1913年7月18日付で参謀本部アジア部長ツェイリが、1万デシャチーナの土地取得に関する1913年6月17日付のアドロニコフとイスラーム・ホジャとの間の仮契約を認証しており [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, лл. 2-3об.]、1914年6月5日付でアドロニコフは参謀本部長ミフネヴィチ Н. П. Михневич (在任1911-1917年) に対してラウザーン荘におけるアムダリヤの水利権の認可を請願している [ЦГА РУз: ф. 7, оп. 1, д. 5007, лл. 5-6]。ブハラ・アミール国領内のカルシ平原における灌漑事業において、アドロニコフは、ロシア政府機関への請願を行い、その費用を負担したという [РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 852, л. 23]。
- (32) 1911年から1913年にかけて、土地整理農業総局、トルキスタン地方農業国有財産局へのトルキスタン、ブハラ、ヒヴァ領内での灌漑事業に認可を求める請願は約50件にのぼった [Вексельман 1987: 78]。

た。また同規程262条は、非ロシア帝国臣民、現地人以外の非キリスト教徒による土地を含む不動産の取得 *приобретение земель и вообще недвижимых имуществ* を禁止していた〔*Положение* 1901: 72³³⁾〕。さらに1836年会社法で定められた利権 *концессия* 制度の枠組みが1917年まで継続した帝政ロシアにおいて、企業家は政府関係各省から事業の認可を得る必要があり、それは多大な時間と労力を要した〔Owen 1991: 6-7, 18-23〕。それゆえ、企業家は外国資本および特定民族籍（現地人以外の非キリスト教徒、すなわち帝政ロシア内地のユダヤ人など）の資本を容易に導入できなかった³⁴⁾。エルモラエフはおそらくこうした状況を指して、灌漑事業における私的イニシアチヴに対して、ロシア領トルキスタンには閉ざされていると指摘した〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 11〕。

以上のように、1910年代トルキスタンの灌漑事業に進出していた企業家たちが土地所有権を取得することは困難を極めていた。そこでアンドロニコフらは、ヒヴァ・ハン国に存在したハンの勅令発布による国有地の私有地への移転の制度を利用した。つまり彼は、ハンの勅令を受領してヒヴァ・ハン国領内に私有地を取得し、その勅令にロシア語で当該の私有地に対する彼らの所有権 *собственность* を確立したことを明記させることに成功した³⁵⁾。さらに彼は、

33) この規制は1897年緩和され、非ロシア帝国臣民、現地人以外の非キリスト教徒が出資する可能性のある合資会社と株式会社 *товарищество на паях и акционерное общество* は、大臣委員会 *Комитет Министров* の審議を経て皇帝の勅許により土地を含む不動産の取得が可能となった〔*Положение* 1901: 72-73〕。しかし1914年にかけてトルキスタンのみならず、帝国内全土において土地への投機や外国資本の浸透に対する政府内の懸念が高まり、再び企業家の土地所有権取得規制は強化される方向に向かっていた〔Owen 1991: 173-180; Joffe 1995: 377〕。トルキスタンにおける土地所有権取得の規制の背景には、ユダヤ人やアルメニア人などによる土地集積に対する総督府の警戒があったとされる〔Joffe 1995: 376-377〕。リュコシンはラウザーン荘の土地がユダヤ人に転売される危険性があることを指摘している〔ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, лл. 33об.-34〕。

なお、統治規程の国有地規定ならびに徴税に関する問題については、ベアトリチェ・ペナティの一連の議論を参照〔Penati 2010; Penati 2011〕。

34) ロシア領トルキスタンにおける企業家の灌漑への投資に対する、その他の様々な規制については、〔Joffe 1995〕を参照。

35) 元宮廷付顧問 *отставной надворный советник* コルニコフ Василий Корнилов が、「ムスリム語 *мусульманский язык*」すなわちテュルク語の正文をロシア語に翻訳したとされる〔ГМИ: кп. 3894, л. 11; РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 98〕。

帝政ロシアのトルキスタン統治を担う軍政官であったアムダリヤ分区分長官からその所有権取得を追認してもらうことで、ロシア政府が認める約2万デシャチーナもの土地所有権を確立しようとしたのである³⁶⁾。このことは以下の事実からも間接的に確かめられよう。まず、イチャン・カラ博物館蔵3894文書の契約書を見ると、先行研究の指摘とは異なり、明らかにアンドロニコフとプチャーロフに不利な内容が記されている³⁷⁾。またアンドロニコフは、参謀本部への

36) テュルク語文面においては、19400デシャチーナの国有地 *mamlaka-yi pādshāhī* がアンドロニコフ、プチャーロフ両名の私有地 *milk* となり、ロシア語文面においては、彼らに「国家の国有地 *казенная земля государства*」の「永代所有権 *потомственная собственность*」が認められた、と記されている [ГМИ: кп. 3894, лл. 2об.-3]。また1500タナープの土地に関しては、テュルク語文面においてハンの私有地がアンドロニコフとプチャーロフの私有地となったとのみ記され、ロシア語文面では「ワクフ施設が利用している」1500タナープの「全ての用益を伴う永代所有地 *собственная потомственная земля со всеми угодьями*」を両名に売却した、と述べられている [ГМИ: кп. 3894, лл. 1-3об., 8]。これはハンがワクフ地を自身の裁量で処分したことを示している。こうした行為がどのように合法化されていたのか、という点はさらなる考察を要する。

なお本論においては、テュルク語の *mamlaka-yi pādshāhī* およびロシア語の *казенная / государственная земля* を「国有地」と訳出している。中央アジアにおいて優勢な法学派であったハナフィー派の見解によれば、*mamlaka-yi pādshāhī* は元来、所有者が納税能力を喪失して放棄し君主の管轄下に入ったハラージュ地と定義され、君主はハラージュを徴収すべく小作に出すべきとされていた。しかし土地を放棄した所有者の所有権は法的には喪失しなかったため、君主はハラージュに加え、その本来の所有者への補償額を徴収することになっていた。18世紀後半になると、この補償額は君主が受けとるべき土地の管理費にすり替えられた。そして本来の所有者の権利は消滅し、君主が自主裁量で処分できる国有地になったとされる [磯貝 1999: 56]。また、*собственность* はエカテリーナ2世の治世にフランス語の「所有権 *propriété*」をもとに造られた用語であり、ロシア固有法上の *владение* とは区別される。1832年のロシア帝国法律集成において、*собственность* を取得した者は、ある財産の「占有 *владение*、利用 *пользование*、処分 *распоряжение*」という三つの権能を有するものと規定された [大江 2012: 39-55]。1860年代以降帝政ロシアの直接統治ないし保護国の支配のもとにあった中央アジア南部定住地域において、テュルク語ないしペルシア語で表現された土地の範疇や所有権を示す用語が、ロシア語のどのような用語で説明されるべきか、という問題への共通理解は生みだされなかったようである。この点については [Sartori 2010] を参照。

37) 第10、11条（自由な転売の制限）、第14条（有償取得によるハンの土地内での自由な要塞、バザール、モスク、運河の敷設権）、第17条（ハンの土地内の地下資源の所有権）は、ハンが所有権を譲渡された土地に介入できることを担保していた [ГМИ: кп. 3894, лл. 7-9об.]。

1914年6月15日付請願書において、自らがラウザーンにある土地の「完全にして永代の所有権 *полная и потомственная собственность*」を取得したと主張している [ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 324, л. 40-40об.]. これらは、アンドロニコフらが不利な契約内容にもかかわらず、自身の土地所有権を確立することに腐心していたことを物語っている。

トルキスタンにおいて株式会社形態での灌漑事業を計画しながらも政府の様々な規制に直面していた企業家の中で、アンドロニコフはそのロシア政府内におけるトルキスタン行政上層部（陸相、参謀本部アジア部長）との人脈、自身が持つ省庁への請願手法、貴族身分を利用したブハラ・アミール、ヒヴァ・ハンとの人脈を利用して、そうした規制の「抜け穴」を提供できる立場にあったといえよう。構造的には、トルキスタンの灌漑への進出を企図した企業家に対する帝政ロシア政府の規制こそ、ロシア政府官僚上層部において異様な立場を享受しえたアンドロニコフが、ラウザーン荘設立に見られる企業活動においても中心的な役割を演じることができた要因であったと考えられる⁽³⁸⁾。

第3章 トルクメン問題とラウザーン荘の終焉

それでは、ヒヴァ・ハン国政府のラウザーン荘設立に対する姿勢はどのようなものであったのか。第1章で述べたように、ヒヴァ・ハン国政府は1910年から大宰相イスラーム・ホジャの主導のもと改革に着手したが、それは財政難を引き起こしていた。また1899年に発生したトルクメンの騒擾は、1911年アムダリヤ分区分長官グルシャノフスキーの介入によるラウザーン運河の復興を契機に

(38) アンドロニコフは、当時のトルキスタン行政に蔓延していた収賄とも無縁ではないであろう。サーディコフによると、ヒヴァ・ハンから陸相スホムリーノフ、参謀本部アジア部長ツェイリ、トルキスタン臨時総督マルトソン、シルダリヤ州知事ガルキン、アムダリヤ分区分長官コロソフスキー В. П. Колосовский（在任1914-1916年）に、様々な名目で賄賂が渡されていた [Садыков 1965: 177-178]。

またソ連期の研究者が指摘した国営事業予定地の先占も、ラウザーン荘の目的の一つであった可能性は排除できない。当時ラウザーン荘の一帯では、土地整理農業総局を中心とした灌漑計画が策定されようとしていた [Цинзерлинг 1927: 26]。

再燃することになった。

ヒヴァ・ハン国政府はラウザーン荘設立計画を、改革による財政難を国有地の売却によって打開する政策の一環として位置づけた。1913年6月アンドロニコフがヒヴァを訪問したのち、ハン国政府は分与規定案を作成した。この分与規定は、地税負担を条件として国有地を分与する目的を持っており、アンドロニコフとプチャーロフの土地取得もこの規定に沿って行われることになっていた〔РГИА: ф. 630, оп. 2, д. 853, л. 3-3об.; ЦГА РУз: ф. 1, оп. 17, д. 957, лл. 17-20³⁹⁾〕。アンドロニコフと仮契約を締結したイスラーム・ホジャは、おそらくこの国有地分与を推進した。彼は1913年8月9日何者かによってヒヴァのイチャン・カラ内で殺害されたが〔Тухтаметов 1969: 83-84〕、土地取得交渉はその後も続けられ、1913年12月30日付で勅令が發布されたのである。そのうつしであるイチャン・カラ博物館蔵3894文書によると、契約書第5条にアンドロニコフとプチャーロフ両名は、土地取得から5年目以降ウズベク住民と同額の地税をハン国政府に納入すること、同第6条に課税はタナープ単位で実施されること、そして第7条にハン国政府が増税を行った際にはそれに従うことが定められていた〔ГМИ: кп. 3894, лл. 6-7〕。

このように、ラウザーン運河周辺はロシア人企業家たちの灌漑事業の対象地となったばかりではなく、ヒヴァ・ハン国政府の国有地分与の対象地であった。

39) 分与規定の正式な名称は、「ヒヴァ領内の非灌漑地を諸人に賃貸ないし諸人の私有地とし、国庫への納税を条件に分与する諸規定 *Khīva yūrtidāghī adrā' yerlārni harkīmgha ijāragha va milk tīb pādshāhligh maw'natī bīla bīrlīmākīnī tartībārī / Условия раздачи разным лицам в арендное пользование и потомственное владение свободных земель Хивинского Ханства за установленные подати*」で、国有地の分与を受ける際の条件ならびに被授与者の土地利用や灌漑に関する諸義務を定めた20カ条から成っていた〔ЦГА РУз: ф. 1, оп. 17, д. 957, лл. 17-20〕。この分与規定案をめぐるヒヴァ・ハン国と帝政ロシアとの間の論争およびアムダリヤ流域の灌漑利権問題については、〔塩谷 2012〕を参照。

1913年7月までに、アンドロニコフ以外にコヴァレフスキー А. Н. Ковалевский, ニコラエフスキー, さらに1914年にはゴリツィン公 князь П. П. Голицын といったロシア人企業家が、ヒヴァ・ハン国領内における土地取得と灌漑事業を計画しており、それらはすべてラウザーン運河およびダリヤルクの沿岸およびその周辺部に集中していた〔РГИА: ф. 432, оп. 1, д. 805, л. 2-2об.; ЦГА РУз: ф. 1, оп. 17, д. 957, лл. 23-24; ф. 7, оп. 1, д. 4995〕。史料の残存状況から、これらの事業はいずれもラウザーン荘の計画以上に進展することはなかったようである。

ハン国政府は国有地分与にともなう売却益と地税収入に期待したことは間違いない。しかしこれだけでは、なぜラウザーン運河周辺がこうした計画の対象となったのかを説明するのに十分ではないだろう。当時のこの地におけるハン国政府とトルクメンとの関係を視野に入れて考察する必要がある。

ヒヴァ・ハン国政府は、トルクメンとの間でのラウザーン運河をめぐる紛争の解決をラウザーン荘設立に期待していた可能性がある。リュコシンによると、当時のハン国政府は、ラウザーン運河周辺においてトルクメンと、折半小作人として農耕に従事していたロシア臣民のカザフとの間で水利用をめぐる対立を引き起こさせ、前者の後者に対する略奪行為を口実に、ロシア当局の介入を期待していたという〔ЦГА РУз: ф. 2, оп. 1, д. 314, лл. 28об.-29〕。イスラーム・ホジャのもと改革を推進するハン国政府が、宮廷貴族でありトルキスタン行政の上層部と人脈を有したアンドロニコフに、トルクメンとの紛争が続くラウザーン運河沿岸の土地所有権を認めることで、トルクメン側のさらなる反発があった場合には、1873年の和平条約12条によって保障されていたロシア帝国国民の不動産取得の権利〔Жуковский 1915: 181〕への侵犯を盾に、トルキスタン総督府さらには中央政府の介入を期待した可能性は高い。それは同時に、シャイフ・ナザル・ヤサウルバシを中心とした強硬派に対して、対トルクメン政策では穏健派の立場にあったイスラーム・ホジャが、武力行使を避けつつトルクメンを臣従させるための方法として考え出したのかもしれない。

これに対して、マフムード・ハン・アタリハノフは、ラウザーン荘の設立に反対した。彼は、1914年9月ごろに露亜銀行新ウルゲンチ支店が組織したラウザーン荘の警備隊の活動を妨害し、荘内の住民の新ラウザーン運河の水利用に抗議した〔РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 478, лл. 52-55〕。1915年3月露亜銀行新ウルゲンチ支店は、このマフムード・ハン・アタリハノフによる妨害をヒヴァ・ハン国政府、アムダリヤ分区長官に訴えたが、いずれも聞き入れられず、事業の着手は延期された⁽⁴⁰⁾。1915年春以降トルクメンの反乱は拡大し、ハン国政府はハ

(40) リュコシンの後任であったコロソフスキーは、ラウザーン荘に対するトルクメンなどの妨害に関与しない姿勢を採った〔РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 478, лл. 65-65об.〕。1916年3月、露亜銀行の行員キスリャコフ А. М. Кисляков は、トル

ン国北部の統治能力を喪失した⁽⁴¹⁾。これらの反乱におけるマフムード・ハン・アタリハノフの行動は明らかではないが、1915年夏までに彼はラウザーン荘一帯を占領していた〔РГИА: ф. 630, оп. 1, д. 478, лл. 91-95〕。こうしてラウザーン荘は実質的に消滅したのである。

結 論

以上のように、1913年6月から1914年1月にかけてのアンドロニコフとブチーロフによる土地取得は、アンドロニコフ公、露亜銀行、エルモラエフ技師の三者を主体としたロシア人企業家が、ヒヴァ・ハン国政府の協力のもとで推進した、銀行資本と動力灌漑施設の導入による大規模灌漑の実施と農園ラウザーン荘設立の初期段階であった。企業家たちのヒヴァ・ハン国領内の灌漑事業への進出は、その高い生産性や原綿、アルファルファの供給地としての将来的発展への期待もさることながら、当時トルクスタンの灌漑事業に進出しようとした企業家たちが直面していた土地所有権の制限や株式会社による農園経営の限界を克服する意図を持っていたと考えることができる。一方でヒヴァ・ハン国政府はこうした企業家の進出を利用し、改革の実施に伴う財政難の克服と、ラウザーン運河をめぐるトルクメンとの紛争の解決を目指したのである。しかしこの事業は、一方で帝政ロシア政府の企業活動への規制がハン国へ拡大する結果を招き、他方ではトルクメンの抵抗を受け、頓挫していったのである⁽⁴²⁾。

最後に、ラウザーン荘の位置づけを、ヒヴァ・ハン国政府とトルクメンとの関係に即して考えておきたい。17世紀以降のトルクメン諸部族の本格的なホラズム・オアシスへの流入により、ハン国はつねにトルクメン諸部族の統制に腐

キスタン総督府がヒヴァ・ハン国内のロシア人の企業活動に保護を与えないことを非難している〔Котюкова 2009: 16-17〕。

(41) 1915年3-4月から、トルクメンはヨムート族のジュナイド・ハンのもとに結集し、ヒヴァ周辺に進出するようになった〔*Gulshan*: 48-53; ЦГА РУз: ф. 1, оп. 31, д. 1104, лл. 148об.-149; Котюкова 2009: 12-13〕。

(42) アムダリヤ分区分長官のラウザーン荘に対する消極的な姿勢と、その背景にあった帝政ロシア政府のアムダリヤ流域全体における企業家の灌漑事業に対する規制については〔塩谷 2012〕を参照。

心することになった〔小前 2001〕。ラウザーン運河はホラズム中部に位置し、西部の灌漑の起点の一つであった。1873年の保護国化以降、1850年代にその本流を封鎖し、南北の支流を拡大させて西部の灌漑を進めようとするヒヴァ・ハン国政府と、アムダリヤのカスピ海への転流を実現するためにラウザーン運河本流を復興、拡張し、ダリヤルク（旧河床）にアムダリヤの水をもたらそうとする帝政ロシア政府の灌漑政策の相違は、この運河一帯のトルクメンの自立傾向を強めさせる結果となっていた。筆者はその詳細を別稿において論じるが、ラウザーン荘の計画は企業家のハン国内の灌漑事業への進出であるのみならず、ハン国政府が自立化を強めるトルクメンに対する統制を試みる手段でもあった。しかしこの試みは失敗に終わり、1916年2月ジュナイド・ハンがヒヴァを占領した。その後ロシア軍の介入と革命による混乱を経て、1918年1月から1920年4月にかけてハン国は彼の実質的な支配下に置かれるのである。

参考文献

未公開史料、文書館略号

ГМИ: Государственный музей-заповедник «Ичан-кальа».

РГИА: Российский государственный исторический архив.

ЦГА РУз: Центральный государственный архив Республики Узбекистан.

Gulshan: Mullā Hasan Murād Qārī Kāmkār, *Gulshan-i sa'ādat*, Институт востоковедения им. Абу Райхана Бируни Академии наук Республики Узбекистан, рук. инв. № 7771.

一次史料（公開）

Гельман, Х. В. 1900. ‘Обводнение старого русла Аму-Дарьи,’ *Известия Туркестанского отдела Императорского Русского географического общества*, том II, выпуск I, стр. 120–165.

Котюкова, Т. В. 2009. ‘Восстание туркмен в Хивинском ханстве в 1916 г.,’ *Вопросы истории*, 2009–9, стр. 3–18.

〔Кривошеин, А. В.〕 1912. *Записка Главноуправляющего землеустройством и земледелием о поезде в Туркестанский край в 1912 году: Приложение к всеподданнейшему докладу*, Полтава: Электрическая типо-литография И. Л. Фришберга.

Положение об управлении Туркестанского края. С изменениями и дополнениями по

- 1-е Января 1901 года, Ташкент: Типо-литография бр. Порцевых, 1901.
- Редигер, А. 1999. *История моей жизнь: Воспоминания военного министра*, Москва: Канон-пресс, том II.
- Руднев В. М. 1998. 'Правда о русской царской семье и темных силах,' Н. А. Соколов, *Предварительное следствие 1919-1922 гг.: Сборник материалов*, Москва: Студия ТРИТЭ, стр. 148-165.
- 'С берегов Аму-Дарьи,' *Туркестанский курьер*, № 168, 1916.
- Юсупов, П. Х. 1999. *Ёш Хиваликлар Тарихи (Хотиралар)*, Маъсул мухаррир ва сўз боши муаллифи М. Матниёзов, Урганч: Хоразм нашриёти.

二次文献

- 磯貝健一 1999 「一七世紀初頭ブハラの死地蘇生文書について」『史林』82-2, 32-68頁。
- 大江泰一郎 2012 「ロシアの法学と市民社会の概念——パシュカーニス理論を再読する——」『早稲田法学』87-2, 26-74頁。
- 小前 亮 2001 「コングラト朝ムハンマド・ラヒーム・ハンの政権について——*Firdaws al-iqbāl* による考察——」『内陸アジア史研究』16, 39-59頁。
- 小松久男 1996 『革命の中央アジア——あるジャディードの肖像——』東京大学出版会。
- 塩谷哲史 2012 「帝政末期アムダリヤ流域の灌漑利権問題に関する一考察——ラウザーン荘設立をめぐるロシア=ヒヴァ・ハン国関係の変遷, 1913-1915年——」『メトロポリタン史学』8, 107-129頁。
- 矢後和彦 2008 「露亜銀行（一九一〇～二六年）覚書」左近幸村編『近代東北アジアの誕生——跨境史への試み』北海道大学出版会, 163-178頁。
- Becker, S. 1968. *Russia's Protectorates in Central Asia: Bukhara and Khiva, 1865-1924*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Bregel, Y. 1981. 'Nomadic and Sedentary Elements among the Turkmens,' *Central Asiatic Journal*, 25, pp. 5-37.
- Bregel, Y. 2007. *Documents from the Khanate of Khiva (17th-19th Centuries)*, Bloomington, Indiana: Denis Sinor Institute for Inner Asian Studies, Indiana University (Papers on Inner Asia, No. 40).
- Bregel, Y. 2009. 'Uzbeks, Qazaqs and Turkmens,' N. di Cosmo, A. J. Frank, P. B. Golden (eds.), *The Cambridge History of Inner Asia: The Chinggisid Age*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 221-236.
- Fuller, W. C. Jr. 2006. *The Foe Within: Fantasies of Treason and the End of Imperial Russia*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Gerlach, J. D. 1997. 'How the West Was Lost: Reconstructing the Invasion Dynamics of

- Yellow Starthistle and Other Plant Invaders of Western Rangelands and Natural Areas,' Proceedings of California Exotic Pest Plant Council 1997 Symposium.
- Joffe, M. 1995. 'Autocracy, Capitalism and Empire: The Politics of Irrigation,' *Russian Review*, 54-3, pp. 365-388.
- Marshall, A. 2006. *The Russian General Staff and Asia, 1800-1917*, London and New York: Routledge.
- Morrison, A. 2008. *Russian Rule in Samarkand 1868-1910: A Comparison with British India*, Oxford: Oxford University Press.
- Owen, T. C. 1991. *The Corporation under Russian Law, 1800-1917: A Study in Tsarist Economic Policy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Penati, B. 2010. 'Swamps, Sorghum and Saxauls: Marginal Lands and the Fate of Russian Turkestan (c. 1880-1915),' *Central Asian Survey*, 29-1, pp. 61-78.
- Penati, B. 2011. 'Beyond Technicalities: On Land Assessment and Land-tax in Russian Turkestan,' *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, 59-1, 2011, pp. 1-27.
- Sartori, P. 2010. 'Introduction: Dealing with States of Property in Modern and Colonial Central Asia,' *Central Asian Survey* 29-1, pp. 1-8.
- Shioya A. 2011. 'Irrigation Policy of the Khanate of Khiva regarding the Lawzan Canal (1), 1830-1873,' *Area Studies Tsukuba*, 32, pp. 115-136.
- Бартольд, В. В. 1927. *История культурной жизни Туркестана*, Ленинград: Издательство Академии наук СССР.
- Бартольд, В. В. 1963. 'Хлопководство в Средней Азии с исторических времен до прихода русских,' *Академик В. В. Бартольд: Сочинения*, том II, часть I, Москва: Издательство восточной литературы, стр. 435-448.
- Брегель, Ю. 1961. *Хорезмские туркмены*, Москва: Издательство восточной литературы.
- Вексельман, М. И. 1987. *Российский монополистический и иностранный капитал в Средней Азии (конец XIX-начала XX в.)*, Ташкент: Фан.
- Гулямов, Я. Г. 1957. *История орошения Хорезма с древнейших времен до наших дней*, Ташкент: Издательство Академии наук Узбекской ССР.
- Жуковский, С. В. 1913. 'Сейид Ислам Ходжа,' *Восточный сборник*, кн. I, Санкт-Петербург, стр. 205-209.
- Жуковский, С. В. 1915. *Сношения России с Бухарой и Хивой за последнее трехсотлетие*, Петроград.
- Карпов, Г. И, и Д. М. Бацер 1930. *Хивинские туркмены и конец Кунградской династии*, Ашхабад: Туркменское государственное издательство.
- Погорельский, И. В. 1968. *Очерки экономической и политической истории Хивинского ханства конца XIX и начала XX вв. (1873-1917 гг.)*, Ленинград:

Ленинградский университет.

Садыков А. С. 1965. *Экономические связи Хивы с Россией во второй половине XIX-начале XX вв.*, Ташкент: Наука.

Садыков, А. С. 1972. *Россия и Хива в конце XIX-начале XX века*, Ташкент: Фан.

Стогов, Д. 2005. *Право-монархические салоны Петербурга-Петрограда в системе власти самодержавной России конца XIX-начала XX века*, Авториферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук, Российский государственный педагогический университет.

Тухтаматов, Т. Г. 1969. *Россия и Хива в конце XIX-начале XX века: Победа Хорезмской народной революции*, Москва: Наука.

Цинзерлинг, В. В. 1927. *Орошение на Аму-Дарье*, Москва: Издание Управления водного хозяйства Средней Азии.

[Юсупова и Джалилов] 1998. *Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан: История*, сост. Д. Ю. Юсупова, Р. П. Джалилова, Ташкент: Фан.